

震災から25年 あの日を、あなたを忘れない

レクイエム・プロジェクト神戸2020

レクイエム・プロジェクトは、2008年に神戸で始まり、まもなく活動13年目を迎える
全国に広がる追悼と希望の合唱プロジェクトです。

現在、神戸のほかには東日本大震災の被災地、北いわて（岩手県北部沿岸地域）と仙台、
そして東京、兵庫県佐用町、広島、長崎の計7箇所で開催した活動を行っています。

神戸ルミナリエの会場音楽を1999年から現在まで毎年作曲している

作曲家・上田 益が主宰しています。

- 主 催：レクイエム・プロジェクト実行委員会、レクイエム・プロジェクト神戸実行委員会
後 援：兵庫県、神戸市、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、朝日新聞神戸総局
読売新聞神戸総局、毎日新聞神戸支局、神戸新聞社、サンテレビジョン
特別協賛：株式会社 ケー・エフ・シー
協 賛：三菱UFJ銀行、(株)西都、(株)ケー・エフ・シー・マスマスディック、(有)ファスニング機工
(株)石塚工務店、(株)神戸製作所、(有)協立技工、(株)三友ファスニング
サンライズ工業(株)、(株)中外精工、(株)羽根産業社、(株)村井製作所
(有)ロードファスニング、数島製パン労働組合神戸支部、数島製パン労働組合神戸冷食支部
(有)平中鉄工所、(株)IVY-OFFICE、(株)シニアエイド・イノベーション
協 力：(株)ジーベック、和田 忠(グラフィック・デザイン)

2020年 1/19^①

午後1時45分 開演(午後1時 開場)

■ 会 場：神戸文化ホール 中ホール

ごあいさつ

本日は、ご来場誠に有難うございます。

阪神・淡路大震災から 25 年。被災された方々にとっては様々な思いが巡り、四半世紀という年月の流れを、それぞれ深く感じていらっしゃる事と思います。

大阪出身で、学生の頃から神戸が大好きだった私は、震災の前年秋に仕事の拠点を関西から東京に移しました。その翌年の 1 月に震災が起こり、神戸の惨禍を東京でテレビ画面を通して見ることになります。1 週間前には、神戸に仕事でいたにも関わらず、その日は、なすすべもなく、ただテレビから流れてくる変わり果てた神戸の街を愕然としながら見ることしかできない自分がいました。

音楽に何が出来るのか？音楽に果たせる役割があるのか？悶々とする中で、神戸ルミナリエ会場音楽の作曲を仕事とすることになり、1999 年から現在まで 21 年間、毎年ひたすら追悼と希望の楽曲を作曲し続けてきました。震災の犠牲となった方々、そして懸命に生きようとされている被災された方々に捧げるため、思いを込めて昨年までに約 130 曲を作曲しました。

多くの支援や追悼行事が少なくなっていく震災から 10 年となる 2005 年、レクイエム・プロジェクトの前身となる「追悼コンサートいのりのとき」を、主宰しスタートさせます。そこから数えて、本日 16 回（年）目の追悼コンサートを迎えています。

神戸で 2008 年に始めたレクイエム・プロジェクトは、自然災害や戦災で傷ついた全国 10 箇所（北いわて、仙台、東京、神戸、兵庫県佐用町、広島、長崎）に広がり、現在も 7 箇所（北いわて、仙台、東京、神戸、兵庫県佐用町、広島、長崎）で継続した活動を行っています。震災から 25 年が経過しても、神戸での活動が意味を失うことはありません。

追悼と、25 年という歲月への思いが会場全体を包み込み、共有できればと思います。

どうぞよろしくお願い致します。

レクイエム・プロジェクト 代表、作曲家：上田 益（うえだ すすむ）

上田 益（うえだ すすむ）…………… 作曲家・レクイエム・プロジェクト代表



京都市立芸術大学音楽学部作曲専攻卒業。廣瀬量平氏に師事。京都音楽協会賞受賞。1980 年度文化庁芸術家国内研修員に選出され、東京において研鑽を積む。クラシック音楽の作品のほか、長野オリンピック・公式楽曲「WINTER FLAME」の作曲や神戸ルミナリエの音楽、「1 リットルの涙」「黒革の手帖」などのテレビドラマ音楽、NHK の番組音楽などを多数手がける。阪神・淡路大震災から 15 年となる 2010 年に向け、2008 年より追悼と希望の合唱プロジェクト「レクイエム・プロジェクト」を神戸で実施。被災者自らが合唱団員として参加するその活動は全国 10 箇所に広がり、現在もその活動を神戸・東京・仙台など、全国の 7 つの地域で継続して行っている。合唱作品も多く、全音楽譜出版社、カワイ出版から作品集合計 21 冊が出版されている。

また海外でもレクイエム・プロジェクトのコンサートが行われ、ブラハ（2012 年、ドヴォルザーク・ホール）2014 年にはウィーンの聖シュテファン大聖堂主催公式グランドコンサートにおいて「レクイエム～あの日を、あなたを忘れない～」などを演奏。10 分以上のスタンディング・オベーションが続き、教会でのコンサートとしては異例の反響となった。2016 年 9 月には、バチカン教皇庁の特別な許可を得て、復興祈念・平和への祈りを目的としたレクイエム・プロジェクト「バチカン・イタリア特別公演」を実施。サン・ピエトロ大聖堂、システリーナ礼拝堂（以上バチカン）、聖フランチェスコ聖堂（アッジジ）、サンタ・トリニータ教会（フィレンツェ）で、国内各被災地からの合唱団有志と共に演奏を行い、大成功を収めた。またこれら公演に際し、新作「ミサ・プレヴィス～平安への祈り～」(全音楽譜出版社)を、フランシスコ法王へ献呈する栄誉をバチカン教皇庁より与えられた。

昨年 10 月にはポーランド公演を行い、シフィドニツァ、クラコフ、ワルシャワに於いて好評を博す。

レクイエム・プロジェクト神戸実行委員会

実行委員：青山佳弘、青山真理子、浅野美佐子、高田裕子、林 康文、松本義郎

第1部

* 作曲はすべて上田 益

① 神戸ルミナリエ2018年、2019年の音楽から

① 祈りの時 (2018) Tempus Precationis

※この楽曲は、神戸いのりのとき合唱団が
2080年に結成され、初めて練習した曲でもあります。
詩を書いてくださった「もりちよこ」さんは、
東京で活躍する作詞家で、すが、神戸出身。
阪神・淡路大震災で姪御さんを亡くされています。

ところを寄せ合う時 涙は祈りになる
祈りは歌になる 歌は、希望になる

日本語詩:もりちよこ
ラテン語訳:MARIA ARGYRAKI

② サルベ・レジーナ (2018) Salve Regina

元后、あわれみの母
われらのいのち 喜び 希望
旅路から あなたに叫ぶエヴァの子
なげきながら泣きながらも
涙の谷にあなたを慕う
われらのためにとりなすかた
あわれみの目をわれらに注ぎ
どういあなたの子イエズスを
旅路の果てに示してください
おお いつくしみ 恵みあふれる
喜びのおとめマリア

③ 25年目のノエル ~ Sanctus ~ (2019)
Noel in the 25th year - Sanctus -

聖なるかな 聖なるかな
聖なるかな 万軍の神なる主よ
天と地は、あなたの栄光で満ちています
いと高きところに、オザンナ

④ いのちはいつも輝いている (2019)
Vita semper luceat

いのちを感じる時
いのちを産み出した母の偉大さを思います。
いのち(命)が失われる時
いのちを産み出した母の悲しさを思います。
神から授かったかけがえのない
大切ないのち
いのちが受け継がれ、輝き続けますように。

日本語詩:上田益
ラテン語訳 REGINA J JUNO

② スターバト・マーテル ~悲しみの聖母~より

1. Stabat Mater dolorosa

母は悲しみに暮れて立っていた
十字架の傍で、涙を流し
わが子が(十字架に)架けられている間。

2. Cujus animam gementem

苦悩し、憂い、悲しむ
その人の魂を
剣が貫き通した。

3. Benignitatem matris recordaris ?

母の優しさを覚えていますか?
母の温もりを覚えていますか?

あなたのそばで、
いつも母はあなたを見守っています。

母の悲しみを知っていますか?
母の喜びを知っていますか?

母の涙は 夜空に広がり
星となって 輝いています。

日本語詩:上田 益
ラテン語訳 REGINA J JUNO

5. Pro peccatis suae gentis

自分の民の罪のために
イエスが責められ
鞭打たれるのを見た。

いとしいわが子が
見捨てられ、死んでいき
魂が解放たれるのを見た。

9. Quando corpus morietur

肉体が死んでしまっても
魂には楽園の栄光が
与えられますように。

10. Precor ut homines beati sint

人々が幸せでありますように。
人々が希望を持てますように。
人々が平和でありますように。
楽園の栄光を。
アーメン

日本語詩:上田 益
ラテン語訳 REGINA J JUNO

③ いのちのメッセージ朗読高田 薫

※このメッセージは今から10年前、阪神・淡路大震災から15年となる2010年1月17日に行った「レクイエム・プロジェクト神戸」のコンサートに向け、震災当時の思いなどを、広く一般から公募した100文字メッセージから抜粋した10編です。当時、集まったメッセージは一般、神戸合唱団員それぞれ約100通。合計200通を超えました。これらのメッセージに込められた思いは、レクイエム・プロジェクトの原点そのものです。

◆
終生忘れられないあの日。
救援物資を積み込んだ「砂利船」で寒風のなかを
大阪港から神戸港に着いたその日から一週間。
亡くなられた方に無念の涙で手を合わせ、
傷つき痛みに耐える方を励まし、避難所を訪れ、
手をとって慰め合った。一人の生命がいかに
大切な。身をもって学ばせて頂いた。
＜大阪市都島区 木村勝＞

◆
阪神淡路大震災で両親親類の家が全壊。
しかし幸いにも命を失わずにすみました。
夜中に芦屋を通過した時見た星空、あんな低い所に
星を見たのは初めてでした。あるはずの家並が全て
瓦礫と化したからです。その上に幾つもの花束が
シルエットで見えた時、涙を抑えることはできませんでした。
＜兵庫県西宮市 松井恭子＞

◆
「命」があんなにあっけないものだったとは、
その日まで思いもしなかった。長い間、病院に勤めていて、
人の生き死には充分経験しているのに。
年老いたお父さん、お母さんが、息子夫婦の遺体を引きとりに
来られた。「順番が違う」とつぶやかれた、
あの日から15年。お元氣だろうか。
＜神戸市東灘区：古谷敏郎＞

◆
生き地獄。迫り来る火の手に、
身動きもできぬ崩壊家屋の下敷きになった人々。
それを助けようと渾身の力を振り絞った人々。
「力尽きて生きのまま焼き殺された人々」の
心情と情景を思うとき、いたたまれない気持ちになる。
人命は地球より重いのだ。
＜神戸市東灘区 福田尚＞

◆
お母さん、一人暮らしをさせてごめんね。
電話の声は明るく弾んでいても、
本当はとっても怖がり。この間の台風の時も、大雨の時も、
やっぱり1月17日を思い出してしまうのですよね。
レクイエムの聖なる光が、母を包んでくれますように。
神戸から日本中へ、世界中へ、そして天国へ…
この歌声が届きますように。
＜音楽のまち 川崎にて：岩本孝子＞

◆
電車を乗り継ぎ辿り着いた。泣きながら、
現実とは思えない街を彷徨った。
小さい頃、祖父と手を繋ぎ歩いた大好きな街。
優しい思い出には、いつも痛みが伴うようになった。
心の奥で、今も苦しみ続ける人達の事を、
いつも想い、祈っています。どうかきっと、きっと
幸せになって下さい。
＜神奈川県横浜市：森三雪＞

◆
阪神淡路大震災の事を語る時、
忘れてならないのは、「今時の若者の活躍」です。
何がおこったのか受け入れられず右往左往していた被災者を
暖かく見守り、行列の説明、施策の説明、ニュース発行等、
被災者の手足となって動いてくれて有難う。
やる時はやってくれると信頼を寄せました。
＜神戸市灘区：澤田清方＞

◆
日々老いていく身であっても、
まだまだやりたい事やらねばならない事を思う時、
突然ふりかかった災害で生涯を断たれた方々の
無念さが今も胸に重い。私達はその犠牲を常に胸に
とどめておかなければならない。
その失われた多くの命は追悼の人々の心の中でこそ永遠に
生き続けるのだから。
＜大阪市北区：八田邦子＞

◆
震災直後は人間を信じる事ができた。
人は自分を顧みることなく他の人を助けた。
人間が神様のように思えた。
そして、時が過ぎた。人間は又以前と同じ
普通の人間になった。
人間が神様のように思える社会を、
残された人々はどうのように実現すべきだろうか？
＜神戸市西区：清水啓道＞

◆
阪神淡路大震災は私に様々な体験をさせてくれた。
人間が死ぬということ。人間が生きていくということ。
そして何よりも手を取り合い、復興までの道のりを
何年もかけて削り上げてきたこと。私自身に出来ることは、
大震災について語ること。
震災を知らない今の子供達に伝えていきたい。
＜兵庫県明石市：伊藤直樹＞

④ レクイエム ～あの日を、あなたを忘れない～

- | | | |
|--|---|---|
| 1. Requiem aeternam
(レクイエム・エテルナム) | ↓永遠の安息を 彼らにお与え下さい、
主よ。絶えざる光が 彼らを照らしますように。
神よ、シオンでは賛歌があなたにふさわしく、
エルサレムではあなたへの誓いが果たされます。 | 私の祈りを聞いて下さい。
肉なるものはみな あなたのもとに来ます。
絶えざる光が 彼らを照らしますように。
永遠の安息を 彼らにお与え下さい、主よ。 |
| <hr/> | | |
| 2. Kyrie
(キリエ) | ↓主よ、憐れみたまえ
キリストよ 憐れみたまえ
主よ、憐れみたまえ | |
| <hr/> | | |
| 3. Dies irae
(怒りの日) | ↓怒りの日、その日は。
世のすべては灰に帰る、
ダヴィドとジビラの証しの通りに。 | その恐しさはいかなるものであろうか、
審判者が来て
厳しく尋問される。 |
| <hr/> | | |
| 4. Occursus et discessio
(出会いと別れ) | ↓出会いと別れ それは流れ星のようだ
心の中でいつまでもいつまでも美しく輝いている
あなたを失ってから ずいぶん時間が経ちました | 元気ですか？ 寒くないですか？ 私が見えますか？
私はいつも あなたの思い出を 大切にしています |
| <hr/> | | |
| 5. Lacrimosa
(ラクリモザ～涙の日～) | ↓涙の日 その日は
罪ある者が裁きを受けるために
灰の中からよみがえる日です。
神よ、この者をお許してください。 | 慈悲深き主、イエスよ
彼らに安息をお与えください。
アーメン。 |
| <hr/> | | |
| 6. Sanctus
(サンクトゥス) | ↓聖なるかな 聖なるかな 聖なるかな
万軍の神なる主よ。 | 天と地は、あなたの栄光で満ちています。
いと高きところに、オザンナ。 |
| <hr/> | | |
| 7. Non oblivisco dolorem
iste die
(あの日を悲しみを忘れない) | ↓涙の数だけ新しい星が生まれる
涙の意味を忘れない
あの日を悲しみを忘れない | 聖なるかな 聖なるかな
永遠の光で 彼らを照らして下さい |
| <hr/> | | |
| 8. Agnus Dei
(アニュス・デイ) | ↓神の子羊、世の罪を除きたもう主よ
彼らに安息を与えたまえ。
神の子羊、世の罪を除きたもう主よ
彼らに 永遠の安息を与えたまえ。
主よ、永遠の光が彼らを照らしますように、
あなたの聖人たちとともに 永遠に | 慈悲深き 主よ
主よ 永遠の安息をかれらに与えたまえ
絶えざる光が 彼らを照らしますように。
あなたの聖人たちとともに 永遠に
慈悲深き 主よ |
| <hr/> | | |
| 9. Lux procul
(光の彼方へ) | ↓光 光 光の彼方へ
光 光 きよらかな光 やさしさ・・・
未来が輝いている 光よ永遠に | 苦悩 苦悩を乗り越えて
光 光 光の彼方へ |
| <hr/> | | |
| 10. Ad futurum movere
(未来に向かって) | ↓光、光 夢に向かって 光、光 未来に向かって
光よ永遠に、光よ永遠に | 聖なるかな 未来 聖なるかな 夢
希望を捨てないで欲しい夢をあきらめないで欲しい |

歌詞：上田 益(4.7.9.10)、典礼文(1,2,3,5,6,8)

上田 益の歌詞は、マリボン岡本様によりラテン語訳されています。

大切なふるさと



1)
今年も夏が来て ひまわりの花が咲く
めぐる季節が いのち育み 鮮やかに輝く
あの日のふるさとの 悲しい思い出を
私の胸に そっと抱きしめ 未来へ向かおう

太陽の光が 希望へと導く
夜空の月は 未来を照らす

いつまでも いつまでも
あなたの笑顔 忘れない
いつまでも いつまでも
大切な ふるさと



2)
秋の澄み渡る風 冬の凍てつく寒さ
めぐる季節が いのち育み 静かに春を待つ
あの日のふるさとの つらい思い出を
あなたの胸に そっと抱きしめ 未来へ向かおう

山々が色づき 夢へと導く
朝霧がいのちの 扉をひらく

いつまでも いつまでも
きみのやさしさ 忘れない
いつまでも いつまで
大切な ふるさと



3)
暖かな春の陽 花たちは咲き競い
星になった あなたの思い 清らかに薫る
菜の花で編んだ 柔らかな架け橋は
残された人を しっかり結び 未来へ導く

美しい桜も 若葉の緑も
ふるさとの明日を 見守っている

※いつまでも いつまでも
私たちと共に 歩む
いつまでも いつまでも
大切な ふるさと
(※繰り返し)



詩、曲：上田 益



混声、同声2部合唱版はカワイ出版から出版。混声3部合唱版は全音楽譜出版社刊・上田益 混声合唱作品集「ふるさとのうた、いのちのうた」に収録されています。

緋田芳江 (ひだ よしえ) ソプラノ



神戸女学院大学音楽学部声楽専攻卒業、京都市立芸術大学大学院修士課程修了。声楽を畑きみ子、松井智恵、故木川田誠、故河本喜介、常森寿子に師事。京都フランス音楽アカデミーに於いてC.エダ=ピエール、R.ヤカールのクラスを受講。イタリア・ウルビーノ古楽講習会を受講。バッハ・コレギウム・ジャパンの声楽メンバーとしてバッハ教会カンタータ全曲他、主要なコンサート及び録音に参加、現在に至る。京都フランス歌曲協会会員。神戸いのりのとき合唱団、川西市民合唱団、エコー梅花ヴォイス・トレーナー。神戸新聞文化センター「バロックを歌いましょう」講師。

北爪かおり(きたづめ かおり) ソプラノ



兵庫県立御影高等学校、京都女子大学文学部教育学科音楽教育学専攻卒業。同大学大学院表現文化専攻修了。古楽、ア・カペラアンサンブル、ソリストとしてバッハ「口短調ミサ曲」、モーツァルト「レクイエム(パイプオルガン版)」、ブラームス「ドイツレクイエム(ピアノ連弾版)」、ロッシェニ「小荘厳ミサ曲」等宗教曲での活躍に加え、レクイエムプロジェクト全海外公演、「上田益レクイエム」「神戸ルミナリエ」CD収録に参加。Voice=Specive, Trinity Vocal Consort Japan, KANSAIBAROQUE2020メンバー。神戸・佐用いのりのとき合唱団、日本製鉄混声合唱団、毎日文化センター等で指導。

栗木充代(くりき みつよ) アルト



神戸生まれ。京都市立芸術大学音楽学部卒業、同大学院音楽研究科修了。兵庫県独唱独奏コンクール1位、友愛ドイツ歌曲コンクール3位、日仏声楽コンクール奨励賞、フランス音楽コンクール、フランス総領事賞を受賞。2016年より、ピアニスト益子明美氏との歌曲による連続リサイタルを開催。CD「日本歌曲全集」の収録に参加し、中田喜直の歌曲を収録。バッハ、ヘンデル等の宗教曲ソリストとしてオーケストラと共演。神戸音楽家協会、神戸フォーレ協会、神戸波の会、ひょうご日本歌曲の会、ソワレの会、各会員。VOXHUMANAメンバー。あじさい混声コーラス指揮者、ずずらんコーラスヴォイス・トレーナー。

眞木喜規(まき よしのり) テノール



主に教会音楽の分野においてバッハのカンタータ、ミサ曲で数多くのソロを歌い、受難曲の福音史家等で活躍。'02年ライブツィヒ・バッハ音楽祭にソリストとして出演。神戸ルミナリエの会場演出音楽に声楽アンサンブルとして録音に参加。現在、神戸市混声合唱団団員。Voice=Speciveディレクター。神戸いのりのとき合唱団合唱指導スタッフの他、日本製鉄合唱団ヴォイス・トレーナー、室内合唱団えべっさんず、コルス・シンフォニクス、各指揮者。日本キリスト教団マラナ・タ教会 モテットを歌う会、ヴェリタス・コア大阪、アンサンブル・ヴォーチェ等で合唱指導を担当している。

大塚雅仁(おおつか まさと) バス



千葉大学法経学部法学科、東京芸術大学音楽学部声楽科を卒業。声楽を多田羅迪夫、野本立人、大島博、指揮法を森垣桂一の各氏に師事。オペラでは「こうもり」「愛の妙薬」「仮面舞踏会」「フィガロの結婚」などに出演。また、千葉大学合唱団など、合唱指揮者 栗山文昭氏の率いる栗友会合唱団の一員として、様々な合唱の研鑽を積む。Tokyo Cantato2005・2009ではシェーンベルク合唱団の指揮者 エルヴィン・オルトナー氏の指揮法レッスンを受講。「第2回 若い指揮者のための合唱指揮コンクール」にて第3位。現在、混声合唱団 Stella Maris 指揮者。丸紅本社合唱団、東京いのりのとき合唱団、柏フィルハーモニー合唱団、三多摩青年合唱団など、多数の合唱団において合唱指導、ヴォイス・トレーナーを務める。

出演者

指揮 上田 益

声楽ソリスト ソプラノ：緋田芳江、北爪かおり アルト：栗木充代 テノール：眞木喜規 バス：大塚雅仁

オーケストラ 長岡京室内アンサンブルと仲間たち

- 1st ヴァイオリン：森 悠子、高木和弘、田中佑子、石上真由子、永ノ尾文江、中野 了
- 2nd ヴァイオリン：谷本華子、岸田謙太郎、宮崎万里、崎国生 ● ヴィオラ：安積宜輝、米田 舞、中田美穂
- チェロ：野村朋亨、柳橋泰志、中島紗理 ● コントラバス：三井脩平 ● フルート：水越典子、永田 明
- オーボエ：中江暁子、須貝絵里 ● ホルン：海塚威生、小坂智美 ● トロンボーン：河端伸幸、喜井 宏
- ハープ：村上ひろみ ● ティンパニ：樽井美咲

合唱

- レクイエム・プロジェクト 神戸いのりのとき合唱団 指導：緋田芳江、北爪かおり、栗木充代、眞木喜規 ピアニスト：林 葉子、陶山薫子、河村泰子
ソプラノ：大槻英子、片山映子、岸田敬子、木戸登紀子、熊谷厚子、近藤朋子、三條エリ子、宍倉正子、田岡潤子、高田 薫、高田裕子、寺町香織、八谷梨紗、広井かほる、藤岡敏子、空谷啓子、西澤由美子、八代谷晶子、白藤悦子、武貞育子、平見安佐子、山崎妙子、松尾亜希子、林 葉子、陶山薫子、河村泰子 アルト：青山真理子、浅野美佐子、岩崎恵美子、梅崎喜久子、亀井純子、河村晶子、島田幸子、高田万里、多田真知子、辰巳由美子、谷本瑞子、中津智子、三宅のぶこ、宮田瑞江、宮武萬壽子、村上玲子、森 昌子、吉川景子、吉田有美子、和田神奈子、佐藤里香、永井久子、足達 恵、宇都宮ますみ、村上純子、伊藤芳恵 テノール：青山佳弘、藤井一郎、松本義郎、山口 學、山田達也、喜多泰文 バス：岡本精二、九重谷昌寛、羽倉義征、林 康文、牧田 憲一、落合 弘
- レクイエム・プロジェクト 佐用いのりのとき合唱団 有志 指導：北爪かおり ピアニスト：林 葉子
ソプラノ：梶本とき子、腰前初美、篠原千佳里、藤井きよみ、山下恵梨、山田かおる
アルト：稲田小夜美、碓井多美江、鎌井弥生、酒井道代、竹内弘美、田中やちよ、敏蔭純子、山本ますみ
テノール：久保正彦 バス：大下順世
- レクイエム・プロジェクト 北いわて合唱団 有志 指導：小林友美 ピアニスト：廣崎 恵
ソプラノ：小林友美
- レクイエム・プロジェクト 仙台合唱団 有志 指導：工藤欣三郎、佐賀慶子 ピアニスト：菅原紀子
アルト：菅野尚子 テノール：海老誠一
- レクイエム・プロジェクト 東京いのりのとき合唱団 有志 指導：本宮麻子、横町あゆみ、鏡 貴之、大塚雅仁 ピアニスト：小舟戸夕紀、倉片 明、箭野純子
ソプラノ：石井由美子、川崎洋子、寺田千晴、荒船禎子、本田俊紀恵 アルト：池田美恵子、中西敦子、木村美佐子、島田眞美
バス：伊藤俊介、石井洋一
- レクイエム・プロジェクト 広島合唱団 有志 指導：佐伯康則、大島久美子 ピアニスト：大下枝里子、鎌田章子
ソプラノ：花田啓子、山下順子 アルト：伊藤孝子 テノール：松村拓典 バス：平岡昭洋
- レクイエム・プロジェクト 長崎合唱団 有志 指導：志岐光昭、大岩しのぶ ピアニスト：ゲイル徳子、吉田真深
ソプラノ：山川加津枝 アルト：江添郷子、松本新子
- 神戸市立桂木小学校合唱団 指導：留 佐江 ピアニスト：浅海由美子
ソプラノ：林 未愛来、松島愛菜、岡田恵理菜、奥中世莉、上月紅葉、小嶋将尚、四宮直美、神尾 栞、小山田美優、鈴江花音、山本美苑、但馬侑花、村角優芽、西田千夏、中村芽花、小山田結衣、福田 恵、佐藤 凜
アルト：中村夢花、藪本香恋、住野帆香、山田真央佳、梅垣友愛、米田帆伽、栗原由奈、井上鈴菜、中島綾香、熊谷暢乃、江尻風紗
- 混声合唱団 アンサンブル・アワーズ 有志 指導：粟辻泰史 ピアニスト：粟辻紀子
ソプラノ：鈴木真紀子 アルト：粟辻紀子、岩崎訓子、大西みゆき、渡邊彩子 テノール：粟辻 悠

神戸いのりのとき合唱団

ボランティアにはお力にならないけれど...

歌声を日本中に
届けることは
出来る♪
(歌う仲間募集中)



どんな合唱団?



「何を作曲家?」
合唱団主宰者の上田 益です。
(うへだ ますみ)

神戸ルミナリエの会場音楽を
毎年作曲しています!

レクイエム・プロジェクトという合唱
プロジェクトの代表です。
詳しくは「レクイエム・プロジェクト」
検索してみてください!



被災地の詩人ヒメカが書いた
オリジナル曲を歌う
合唱団です。

全国に広がる127拠点の合唱団と
共に歌える活動しています。

海外では、プラハ、ライオン、バチカン
スタジアム、ホーランドで感動的な
公演を果たしてきました。

Let's sing together!

● 合唱団の名称は追悼コンサート「いのりのとき」に由来します。
特定の宗教とは一切関係ありません。

ある団員の話 ... 届けよう! 心の歌と癒しのハーモニー♪

コンサートに初めて行ったとき ありの優しいメロディーで
日頃のモヤモヤとか 押し込んでいた悲しみとか
体の中から反けて

「元氣張らないんでいいんたよー」

と、聞かされてきた気がしました。



今... 私は自分の気持ちを

耳聴く人に伝えようと思ひ

素敵な仲間と楽しく練習しています。



⇒ (Q & A) ←

初心者だから不安、楽譜も読めない上にラテン語の曲なんで...
...大丈夫です! 4人の声楽家と3人のピアノによる丁寧な
指導で発音も発声も安心! メロディーもとってもきれいです。
それにやさしい日本語曲もたくさんあります。

(団員募集要項)

参加資格	歌が好きな方なら年齢、経験問いません。
練習日	月3回 (土曜日 PM 6:00 ~ 9:00)
練習場所	神戸学生青年センター (阪急六甲直ぐ)
団費	3,000 / 月 入団費 1,000 事務費 1,000 (年1回) 楽譜代 別途
申し込み、問合せ	神戸いのりのとき合唱団 TEL 090 6968467 /
ホームページ	L'ÉCLAT PROJECT 公式ホームページ https://www.requiem-project.com/
face book	L'ÉCLAT PROJECT 神戸

ポーランド特別公演～平和への祈り～

2019.10.18～10.27

レクイエム・プロジェクトの活動を行っている
全国7地域から合唱団有志123人のほか、
指揮者、声楽ソリストなど10人の合計133人が参加し、
シフィドニツァ、クラコフ、ワルシャワの3都市で
5公演（献唱、ミサでの演奏含む）を行いました。



シフィドニツァ平和教会でのコンサート



クラコフ 聖カタリーナ教会でのコンサート
(クラコフ・フィルハーモニー管弦楽団)



ワルシャワ 聖十字架教会ミサでの演奏



クラコフ 聖マリア教会での献唱



ワルシャワ大学日本学科設立
100周年記念行事での交流コンサート

阪神・淡路大震災をきっかけに、
ひとりの作曲家の13年間に及ぶ苦悩の時を経て始ったこのプロジェクトは、
神戸から始まり、これまで全国10箇所で開催が行われ、
現在でも継続的にその内の7つの地域で実施されています。
いずれも自然災害や戦災で傷ついた地域です。

LONG

レクイエム・プロジェクト 10年の歩み ～あの日を、あなたを忘れない～

INTERVIEW

そしてプロジェクトを通して作曲した合唱作品のすべては
全音楽譜出版社やカワイ出版から合唱組曲
あるいは合唱作品集として16冊が出版されています。
けれどもここに至るまでの道は決して平坦ではありませんでした。
これからの確かな一歩を踏み出すために
主宰者とともにその歩みを振り返ります。



作曲家、レクイエム・プロジェクト代表、主宰者
聞き手、レクイエム・プロジェクト神戸実行委員、プログラム編集委員



このインタビュー記事は2018年に開催された活動10周年のコンサート時のものです。
阪神・淡路大震災から25年を迎えた今年、もう一度このプロジェクトのことを知っていただきたく、再掲致します。

1. プロジェクト創設の発端と始動

Q(渡辺):レクイエム・プロジェクトの活動が始まって10周年です。このプロジェクトがどんないきさつで始まり、全体像がどうなっているのか、文章だけでは中々理解していただくのは難しいかもしれません。今日は、インタビューという形で、少しでも活動を知っていただきたいと思っています。まず初めに、活動のきっかけとなった阪神・淡路大震災の時は、どうされていたかということから聞かせてください。

A(上田):関西出身の私は震災のあった前年の秋、東京に仕事の拠点を移していました。ですので、あの震災を知ったのはテレビの画面を通してです。見慣れたビルが倒壊している。空襲を受けたように街が破壊され、炎上している。ついこの間、仕事で神戸にいたのに、今はただ傍観者のようにその様子を見ている。自分だけ難を逃れたようないろめたと、無力感に打ちひしがれていました。

Q:それからの日々は、どんな感じでしたか?

A:こんな事態を前にして音楽に力はあるのか? 作曲家としての自分にいったい何ができるのか? それが、阪神・淡路大震災が私に突き付けた命題だと思いながら毎日を過ごしていました。テレビから流れてくる犠牲者の方々の情報や、次第に明らかになる被害状況を見ながら悶々とする毎日でしたが、東京での仕事をまづきちんと確立しないと生活できないので必死でしたし、簡単に解決できる命題ではないので、時間がかかりました。

Q:そんな時間経過の中で、ルミナリエの仕事と出会われたわけですね?

A:はい。震災前から仕事で付き合いのあった(株)ジーベックの三井康嗣(みいこうじ)さんから、「今度ルミナリエの音楽制作の担当者になるのですが、是非一緒にやりませんか?作曲してくれませんか?」と、電話をいただいたのです。震災から4年が経った1999年、私が43歳の時です。(株)ジーベックは神戸市内のポートアイランドに会社やスタジオがあり、会社も当然ながら被災していました。



Q:その仕事は、鎮魂と神戸の復興を願うシンボルとなった光の芸術・ルミナリエで、点灯や消灯、そして光の回廊を歩いているとき聞こえてくるあの会場音楽を作曲するという内容のものでしたね。その時、どんな気持ちでしたか?そして実際に始められて、どんなことを考えていましたか?



A:この仕事こそ震災から突き付けられた命題を解くきっかけとなり、自分のライフワークになると直感しました。そして仕事が始まってからはルミナリエの音楽に真摯に向き合うことだけを考え、毎年ただひたすらに、震災で亡くなった方々、被災された方々、大切な人を失った方々、復興に力の限りを尽くしている方々などへの思いをこめて、試行錯誤しながら作曲していました。

Q:ルミナリエの音楽では、何がテーマでしたか?当初からレクイエム・プロジェクトの構想があったのでしょうか?

A:ルミナリエは毎年テーマがありますが、根底にあるものは「追悼と神戸の街の復興」でした。音楽のテーマは、そのことを踏まえただけで、「追悼と、未来への希望や夢」ということで当初から現在まで一貫しています。ですが、レクイエム・プロジェクトの構想は、まだ生まれていませんでした。



Q:震災から10年経った2005年1月17日、ルミナリエの音楽を演奏されていた声楽家や演奏家の協力を得て、無料の「追悼コンサートいのりとき～あの日を、あなたを忘れない～」を自主企画し開催されます。震災後10年ということに“こだわり”があったのでしょうか?

A:コンサート名の中にも私の『レクイエム』の題名の中にも、《～あの日を、あなたを忘れない～》という文言を入れています。震災後10年を機に始めた理由は、こだわりというよりも、その年を境にきっと追悼のコンサートや行事も少なくなり、記憶が次第に風化していくのではという危惧の念を抱いていたからです。そして始めるからには、10年は必ず続けると自分の中で覚悟を決めて、最初のコンサートにご来場いただいた被災者の方々の前で「最低10年は続けます」と宣言しました。

Q:その追悼コンサートがレクイエム・プロジェクトの直接のきっかけになっていくわけですね?

A:そうですね。ルミナリエの音楽作曲を続けていく中で、自分の作曲家としての存在意義というか、何を創作の根底に置くかということに関して、少しずつですが、自分は楽曲に「いのち」への思いを吹き込むことが役目だと確信していきました。さらに追悼コンサートを続けながら、震災後20年の節目となる2015年に向けて『レクイエム』を作曲し、その時に被災者の方々を中心とした市民合唱団を結成したいと考えるようになりました。つまりプロジェクトを始めるための糸口が、自分の中で芽吹いていったと思います。

Q:ということはプロジェクトの微かな芽吹きはあったけれど、実際に始まるのは当初の予定ではまだ先のことだったのですか？

A:当初は2013年頃のスタートを考えていました。ところが2008年の第4回追悼コンサートを終えた数日後に、会場として毎年使わせていただいていた神戸松蔭女子学院大学のチャペルが、翌年から2年間は使えないということが判明したのです。コンサートの日程は、毎年震災のあった1月17日にと決めていました。2009年から2年間は土日開催になり、よりたくさんの皆さんに聴いていただけたらと思っていたのですが、大学がセンター試験の会場になるため、チャペルも使用できなくなったのです。まだ名称はありませんでしたが、その時「レクイエム・プロジェクト」が私の中で始まったと言えます。翌年のホールの抽選はすでに終わっていたので、正直なところ困った状況でもありました。

Q:会場が決まらない状況を、どうされたのですか？

A:ルミナリエや追悼コンサートで演奏していただいていた声楽家の緋田ご夫妻が協力して下さり、使える教会や会場を探したり、一緒に見に行ったりしてくれました。その時点ではまだ会場は決まらなかったのですが、本当に有難かったですね。今となっては懐かしい思い出です。そして会場を探している時間経過の中で、ふと「震災から15年となる2010年に向けて、レクイエムの作曲を前倒ししよう」という考えが、自然に沸き起こってきました。そして会場も、ジーベックの三井さんが県立美術館に交渉してくれ、翌年のコンサートにも目途が立ったのです。

Q:「レクイエムの初演」の目標が、震災後20年ではなく15年となりました。かなりタイトな日程だったと思いますが、どのように具体化していききましたか？

A:2010年1月17日まで2年を切っていました。ルミナリエの音楽を作曲していたからと言って、レクイエムがすぐに書けるわけではありません。レクイエムを作曲するための心の準備も必要でした。それと並行して活動のコンセプトなどを具体的に考え始め、2月から始めていた準備が一応整ったのが2008年5月だったと思います。その準備の中で、「レクイエム・プロジェク



Q:そういったメンバーのために「レクイエム」を作曲されたわけですね。かなり大変な作業だと思いますが、どのようなアプローチで取り組まれたのですか？

A:最初に考えたことは、どういった内容にするのか、何語なのかということです。キリスト教文化と密接に結びついた所謂クラシック音楽の世界での「レクイエム」で良いのかという問

ト」という名称も生まれ、6月から合唱団員の募集を開始しました。

最初は応募者が少なく、このままなら自分も合唱団員として舞台に立たなければいけないなど思いました。しかし新聞2紙が記事として取り上げてくれたことで、6月末には65名の団員が集まり、後に『神戸いのり」とき合唱団』となるプロジェクト合唱団の活動が7月から予定通りスタートできました。

Q:合唱団の活動は2008年の7月からですが、実際に準備を始めたのが2月ということで、2018年の1月で丸10周年ということなのですね。コンセプトを考えていく中で、レクイエム・プロジェクトの趣旨をどうすることに決めたのですか？

A:当初の趣旨は、「阪神・淡路大震災の犠牲となった方々の追悼」、そして「大切ないのち、生かされたいのちへの思い」を、「被災者自らが歌に託し伝える」ための合唱プロジェクトということです。

Q:どんな方が当初参加されていたのですか？



A:当初は神戸市内の被災者の方々がほとんどで、近隣から少し参加されていました。お1人だけ、兵庫県北部の豊岡から参加された方がいらっしゃいましたが、さすがに月2回練習に通うには遠すぎるということで、数か月で断念されました。また合唱経験がある人もいましたが、7割近い人たちは本格的な合唱は未経験で、発声も当然習ったことが無い、ましてや楽譜は学生の頃に音楽の授業で見た程度というメンバーが中心でした。

震災の年に生まれた中学1年生から80歳代の方まで幅広い世代と、親子や夫婦での参加、そして東京でも2人の方が私の指導を受けながら遠隔地から参加するという、ある意味現在のプロジェクトの姿を象徴するような人たちの集まりとなりました。

題もあります。テキストもラテン語、ドイツ語などと、自国の言語などが考えられ、また独自のレクイエムの意味合いを持つ楽曲なども、可能性としてあります。ただ日本語の場合は、レクイエム的な内容に相応しい詩を探したり、詩人を書き下ろしてもらったりする必要があります。



Q:確かに日本語は合唱未経験者にとっては取り組みやすいと思いますが、表現が生々しくなり、場合によっては歌えなくなるようにも思えますね。それでラテン語を選ばれたわけですか？

A:日本語の場合、被災者の人たちにとっては、きっと辛いものになるだろうと思っていました。ルミナリエでも、楽曲のテキストを決める際にラテン語を選んだわけですね。理由は、あの光の芸術が教会を彷彿とさせるものであったことと、日本語で追悼の楽曲が流れても、生々しすぎると考えたからです。ましてや被災者の人たちが歌うとなると、やはり日本語の選択肢は自然に無くなりました。

その一方、ラテン語は不思議な言語です。宗教曲といわれる楽曲を演奏している人にとっては、ごく日常的なものだと思いますが、クラシック音楽の中では今もなお生き生きと息づいているにも関わらず、キリスト教の教会で使用されることがある以外は、日常では死語となって久しい言語なのです。私のなかでは時間と空間、つまり時代や国や地域を飛び越えてしまう言語のようなイメージでした。

Q:なるほど、そうなのですね。しかしラテン語を使うとなると合唱経験の無い日本人にとっては難しいというか、身近ではなくなる可能性もあるように思います。

A:そのことも可能性としてはあります。ただもうひとつは、神戸の惨禍をより広く海外でも知ってほしい、いつかは海外の人たちにも歌ったり聴いたりして欲しいと考えていました。理由は、海外にも自然災害の被災地が数多くあるからです。そしてヨーロッパに限らず、アメリカ大陸でも、アジアでも、そして今ではアフリカでも、西洋クラシック音楽と呼ばれるものを文化や生活の中に受け入れている国がいくつもあり、ラテン語の宗教曲を聴いたり演奏したりする機会もきっとあるはずですよ。

私の結論としては、ラテン語のレクイエムの形を借り、典礼文と呼ばれるミサで使用されるテキストを素材にしなが、オリジナルの日本語詩をラテン語に訳して加え、作曲することにしたのです。同じようなコンセプトで、ポーランドの作曲家もレクイエムを作曲していることを後で知りました。

Q:いろいろ検討されて、ラテン語のテキストによるレクイエムの形を借りながら作曲されることに決めた後、神戸の合唱団の練習までに全曲完成していたのですか？

A:いえいえ、ラテン語のテキストでルミナリエのために作曲した別の拙作を2曲ほど用意して、まず練習を始めました。被災者でもある団員の思いを私自身がきちんと受け止めることから始めないと、このプロジェクトの中核を担うことになるレクイエムは書けないと思っていました。当初は月に2回の練習でしたが、その中で毎回数名ずつ自己紹介をしていただき、負担にならない程度に震災当時の体験や気持ちを話してもらうことにしたのです。団員同士も殆ど面識がありませんでしたので、私だけではなく団員の皆さんにとっても意味があったと思います。

Q:団員の自己紹介を聞きながら、いろいろ感じられたと思いますが、特に印象的だったことはありましたか？

A:私自身とても大切なことにたくさん気づかされました。特に印象的だったのは、被災の度合いの違いから生じる微妙な被災者間の温度差です。「私よりもっと悲しい人がいるから、私の悲しみなど表に出せない」「自分だけが怪我もせずに生きていて申し訳ない」「私の家は何も被害が無く、給水車が来ても、食料の配給があっても、申し訳なくもないに行くことができなかった」など、被害が少なかった人が「申し訳ない」という感情に苛まれていることが重く、印象的でした。震災から13年が経過していましたが、それでもなお誰もが心のうちに様々な苦しみや悲しみを抱えて生きていることがよくわかりました。



Q:そのことは、当初プロジェクトの構想を練っていた時のコンセプトにも何か変化をもたらしましたか？

A:変化というよりも、よりはっきりと見えてきた部分がありました。それは、たとえ経験が無くても、合唱団員としてプロジェクトに関わることで、自分にとっての「歌う意味」を見つけ、それぞれの思いを音楽に込め、詩や曲に込められた思いを伝える「表現者」「メッセンジャー」になれるはずだということです。とても難しい事のように感じるかもしれませんが、「表現者」であることはプロの演奏家や、コンクールで入賞する上手なアマチュア合唱団だけに与えられた専有物ではないと思っています。その人たちに負けずとも劣らぬ表現する理由、歌う理由を持っていることに、少しでも気づいて欲しいと思うようになりました。

Q:それをどのようにレクイエムに反映させようとしたのですか？

A:それらのことを踏まえて、私が作曲しようとしているレクイエムは、犠牲となった方々の追悼と同時に、生かされた人たちが少しでも苦悩から解放され、前に向かって進んでいくきっかけになるものでありたいと思うと同時に、それが被災者の方々の思いを私なりに反映させることでもあると



思いました。さらに誤解を恐れずに言うなら、作曲家＝表現者としての私の『個』を前面に出すのではなく、奇をてらわず、私自身が被災者の思いを楽曲に込める代理人のような存在でありたいと強く感じたのです。そうなることで、歌う人たちにとって「表現」することの糸口、「歌う意味」を考える糸口になる楽曲が作曲できればと思いました。

Q:ある意味ハードルが高いようにも思いますが、自分にとっての「歌うことの意味」を見つけ、「表現者」を目指すことは、このプロジェクトに関わっていく中で、私も次第に意識するようになってきたと思います。もちろんすぐには出来たことではないので、まだまだわからないこと、出来ないことだらけですが、意識することはとても大切ですね。

A:有難うございます。意識してくれて嬉しいです。詩や曲を適切に感じ取り表現するためには、ラテン語にしても日本語にしても明瞭な言葉が不可欠です。またメロディーをただ歌うだけではなく、音楽のフレーズや詩のフレーズを適切に歌う力なども必要になってきます。そのためには発声はもちろん、練習指導を受ける中で、音楽で表現する力を少しずつ会得することが必要になります。その意味からも、私に出来ないヴォイストレーニングの指導だけではなく、音楽的な表現まで指導して下さる専門的な指導者が、神戸では欠かせない存在だったのです。

Q:神戸は指導の先生方が多く、とても恵まれていると感じていますが、そんな理由だったのですね。

A:神戸ではまず5人の声楽家に指導スタッフをお願いしました。ソプラノが緋田芳江さん、北爪かおりさん、アルトが栗木充代さん、テノールが眞木喜規さん、バスが緋田吉也さんでした。ソプラノ、アルト、テノール、バスそれぞれの声の違いも実際に間近で聴いて知って欲しかったのと、皆さん宗教曲に造詣が深く、演奏にも秀でている素晴らしい演奏家であり指導者です。また指導していく中で同じことを指摘しても、指導者が変われば表現が変わります。そんな多面的な経験をし、いろんなことに気づいて欲しいと思っていました。

Q:まだまだお聞きしたいことがあるので、話をレクイエムに戻しますが、実際はどれくらいの期間で作曲されたのですか？

A:団員ひとりひとりが震災から13年という時間を経て、ようやく少しずつ語ってくれる悲しさや苦しさ毎回の練習で耳を傾け、反芻しながら少しずつ作曲を進めたので、全10曲が完成するまで1年ちょっとかかりました。先ほどもお話ししたように、団員の中には合唱が初めてという方も大勢

いましたが、1年ほどかけて練習すれば何とか歌えるようになることを前提に、できるだけシンプルな楽曲を心掛けつつ、「歌う意味」を考える糸口、そして「表現」することの糸口になる楽曲でもありたかったので、チープなものにならないよう心掛けました。

歌う人たちが出来るだけスムーズに音楽に入っていけることをまず最優先に、楽曲のフレーズを考え作曲したのです。難易度の高い楽曲を好んで練習される合唱関係者の中には、音符や和音がシンプルなものも馬鹿にする人たちもいらっしゃいますが、シンプルなものほど難しく、豊かに表現することは難しいのです。

Q:2009年の第5回「追悼コンサートいのりのとき」で「レクイエム」の一部を初演されましたが、何曲くらいあったのですか？

A:「怒りの日」「出会いと別れ」「あの日の悲しみを忘れない」「未来に向かって」の4曲です。「出会いと別れ」はソロアンサンブル曲ですので、合唱団が歌う曲という意味では3曲ですね。

Q:1年後の2010年、つまり阪神・淡路大震災から丸15年となる年の第6回「追悼コンサートいのりのとき」で、目標どおりレクイエム全曲を初演されます。神戸文化ホールの大ホールがほぼ満杯になる、2000人近いお客さんの心を打つコンサートだったと、先輩たちから聞いています。

A:合唱団員、プロの声楽ソリスト、オーケストラなど総勢約140名が舞台に立ちました。皆さんそれぞれの思いを重ねて、時には涙を流しながらご来場者の心に届く演奏ができたように思っています。新聞で広く公募した、亡くなった人への思いや次世代に託す百文字メッセージの朗読も行いました。この朗読にはNHKと朝日放送、フリーといった立場の違うアナウンサーが複数参加して下さい、異例のことでもありました。

アンコール曲のあと舞台から見た来場者の表情は、ハンカチで涙をぬぐう人、顔をほころばせて微笑んでいる人、いつまでもいつまでも拍手をして下さっている人など様々でしたが、多くの方々に何かが伝わったと実感しました。当時の団員の皆さんの思いが、この成功を導いたのだと思います。

Q:合唱団の練習としては1年半でした。その間、何か団員の中で変化があったのですか？

A:とても嬉しい変化がありました。2008年の練習開始当初からしばらくは、皆さんが抱えている悲しみや苦悩を反映して、とても重苦しい何かがありました。そして自己紹介を続け、相互に語り合ううちに、被害の程度差から生じていた様々な誤解や温度差が次第に薄れていき、歌に思いを託

していくうちに皆さんの表情が明るくなっていきました。

更に、次第に団員が増えていき、2009年のコンサートを聴いて下さった方々が何人も参加され、いつの間にか100人を超える合唱団になっていた時は、有り難かったですね。そして2010年のレクイエム初演を終えた後の、心の奥底に閉じ込めてきた悲しみや苦しみを解き放ったかのような団員の皆さんの温かい涙と笑顔が忘れられません。



Q:私もそのときから参加したかったと思うようなエピソードですね。ところで、いつもお話に「思いを重ねる」「心を重ねる」という言葉がでています。このインタビューを読んでいただいている方々に是非、その意味を伝えて欲しいのですが。

A:日本人は、「心をひとつにして」とか「思いをひとつにして」という言葉が好きです。それを否定するものではありません。ただ被災地には様々な思いがあり、被害の違いや災害後の復興状況の違いから温度差も必ずある。そして戦争で傷ついた地域の場合は、特に経験していない世代が私を含め大半になってしまっている現在、同じにはなれない部分もあるわけです。

そうであっても、皆さんはレクイエム・プロジェクトの趣旨に賛同し、参加してくれています。つまり同じ方向を向いて活動しているはずなのです。それらのことを考えると、「ひとつにして」と言うよりは、「重ねて」「重ね合わせて」の方が、個人的にはより相応しいかなと感じ、様々な思いがそれぞれ共存出来て、重層的であり豊かだと思っています。

Q:他にも使われないようにされている言葉があったように思いますが。

A:それは「支援」と「絆」です。このプロジェクトは、基本的に被災者の方々が自ら参加するものであると同時に、私自身が多くのことを学びながら、被災地の思いを私なりに合唱作品にしていく「場」でもあります。ですから「支援」とは異なるものだと思いますので、私自身はその言葉は使わないようにしています。東日本大震災直後に行った、義援金を被災地に送るためのコンサートでは、あえて緊急支援、被災地支援という言葉は使いましたが、活動そのものでは使っていません。

そして「絆」という言葉も、このプロジェクトを主宰している私が使うと、何か違うような気がして一度も使ったことがありません。活動が全国に広がり、自然につながっていく合唱団の人たちの関係は、「絆」というよりも「同志」に近いものだとは私は感じています。あくまで個人的な考えですが。



2. 神戸から他地域への展開

Q:プロジェクトを他地域へも広げようと考えたきっかけは何ですか？

A:当初この活動は、地域も期間も限定した神戸だけのものと考えていましたが、コンサートを目前に控えたある日の練習の際、100人程の団員に震災時の思いやプロジェクトへの意見などについてアンケートをとりました。すると活動の継続を希望する人が、7割を超えていたのです。ルミナリエの音楽を作曲した人間という以外に私のことを知らなかったはずなのに、趣旨に賛同して活動を共にしてくれた人たちの多くが、続けたいと思っている。それは主宰者・作曲家としてはとても嬉しく有難いことでもあり、その気持ちに応えたいと思いました。

国内には自然災害や戦災で傷ついた多くの地域があります。せっかく活動を続けるのなら、神戸だけにとどまらず国内の被災地にも広げていこう、そして各地で心の痛みを抱えている人と「つながって」いこうと提案しました。そしてコンサートの終わった翌月、2010年2月から早速、他地域へのアプローチを始めました。それと同時に、神戸の合唱団では私をサポートしてくれる「世話役(後の実行委員会)」組織が生まれ、より充実した活動を行うことになりました。



Q:神戸だけにとどまらず国内の被災地にも広げていくことは、すでに考えていたことなのでしょうか。

A:神戸の人たちが「プロジェクトを続けたい」と言ってくれるまでは、全く考えてもいませんでした。続けるならその意味があることとは何なのか、どういう可能性があるのかと、そこで考え始めたわけです。

Q:他の被災地とつながっていくといっても、そう簡単にはいかないと思いますが…。

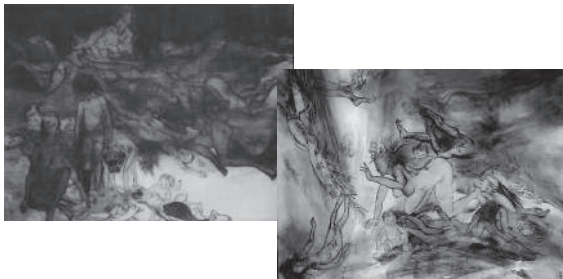
A:もちろん、そうです。地域の状況はそれぞれ違ってきますし、地域性や気質も異なります。プロジェクトを行うには、神戸と同じ方法ではうまくいくはずがありません。それぞれの地域ごとに異なるアプローチが必要になってくることは目に見えていました。「つながる」ということがどういうことなのか、それは私自身がまずそれぞれの地域の人たちと実践し、信頼関係を築いていかなければ、各地の参加者が相互につながることも不可能です。そのためには自分が動く以外に方法はないと思っていました。

神戸の場合は、ルミナリエとの関りがあったからこそ実現できたと思います。もしそれが無ければ、いくら関西出身者だとしても、難しかったですよね。作曲家としての上田益を知る人は限られます。その人間が主宰する「レクイエム・プロジェクト」に対して、興味を持って下さることは殆ど無く、懐疑的あるいは否定的な反応が返ってくるのが自然かもしれません。

金儲けに来たのか？あるいは被災地を利用して有名になりたいのか？と誹謗中傷されることも充分あり得ることですので、友人や知人がいない地域では特に、難しい面が多々あると考えていました。

Q:最初は沖縄からアプローチを始めたとお聞きしていますが、自然災害の被災地から始まったことを、なぜ戦災で傷ついた地域でもと思ったのですか？

A:そうですね。なぜ沖縄からかということも不思議に思われる方がたくさんいらっしゃると思います。私の中では、広島、長崎、沖縄は必然性があるのです。というのも、実は私は和歌山県の高野山にある寺の孫として生まれて、その寺を継ぐはずだったのですが、結果的には違う道を選びました。祖父が住職をしていたその寺に、画家の丸木位里、俊ご夫妻が約3か月滞在されて制作奉納された「原爆の図」2作品〈火、水〉がありました。そのことが大きな根拠となります。



Q:ということは、人生の選択が違えば、今頃はお寺のご住職だったのですね。たぶんそのことを知って、驚かれる方もたくさんいらっしゃると思いますが、お寺にあった丸木ご夫妻の「原爆の図」について、もう少し教えてください。

A:はい。なぜ祖父が住職をする寺に「原爆の図」があったかを詳しくお話するとかなり長くなりますので、要点だけをお話します。祖父は戦争が始まる前に、南方仏教の研究でタイの寺院に僧侶として入っていました。そして戦争が始まり、日本軍がアジアを侵攻していく中、軍の命令でビルマ（現在のミャンマー）に同行し、日本語学校を設立し校長となります。ビルマは凄惨な激戦地ですので、祖父はその惨状を現地で見るとは思いますが、奇跡的に終戦の前年に帰国します。終戦後、政府派遣遺骨収集団に宗教者代表として参加し再びビルマを訪れ、激戦地を巡礼しながら遺骨や遺品を収集し帰国します。そして政府の許可を得てそれらの一部を譲り受け、高野山の寺の敷地に戦没者の供養と平和を願う摩尼宝塔（まにほうとう）を建立し、毎日祈り続けることとなります。おそらく丸木ご夫妻に祖父が制作依頼し、その塔に奉納していただいたのだと思います。

私は小学生の頃からその絵をずっと見続け、祈りを捧げる祖父の姿を折に触れて見ていたのです。戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを、子どもながらに感じていました。そのことが、結果的に広島、長崎、沖縄でのプロジェクトにつながっていくこととなります。

Q:お話を聞いていると、寺は継がなかったけれど、お祖父さんの遺志を継ぐような形で、プロジェクトの趣旨に「平和への願い」が新たに加わったのが、必然のように感じます。

A:無意識でしたが、きっとそうなのでしょうね。丸木ご夫妻は、広島と長崎の「原爆の図」だけではなく、「沖縄戦の図」も制作されています。その図にも描かれている悲惨な地上戦の場となった沖縄、今もなお基地問題という苦悩とジレンマを抱え続ける沖縄の人たちにとっては、本土の人間に対する不信感はきつと根強くあるだろうし、私の思いなどは戯言と受け止められるだろうと思っていました。プロジェクトを進めるにしてもかなりの時間がかかると思い、まず沖縄からと決めたのです。



Q:なるほど。でも実際に進めるのは大変だったと思います。本当はプロジェクトが広がった各地域について個別にたっぷり聞きたいところですが、それぞれの地域に関して少し教えてください。

A:これまで活動の開始順で言うと神戸、東京、沖縄、兵庫県佐用町、長崎、広島、仙台、南相馬、北いわて、気仙沼の10箇所で開催し、そのうち7箇所で開催も継続した活動を行っています。2010年にアプローチした地域は、沖縄、東京、長崎そして兵庫県佐用町の4つです。沖縄は2010年から沖縄戦終結70年を迎える2015年まで丸5年間活動しました。東京は2010年4月から活動が始まり、長崎は2010年に準備を始めましたが、実際に活動が始まったのは2012年9月から、そして佐用町は2010年11月からで、それぞれ現在も活動が継続しています。



Q:2010年に、いきなり新たな3つの地域で活動が始まるわけですね。何も問題なくスムーズに各地ともプロジェクトが始まったように感じる方がいらっしゃるかもしれませんが、実際は色々ご苦労されたのでしょうか。

A:自分が主宰して始めたプロジェクトですので苦労とは思いませんが、簡単ではありませんでした。音楽家の知り合いが一人もいない沖縄のような土地は他にもあり、そこではまず協力してくれる人を探るところから始まりました。特に沖縄では同じような趣旨で活動している合唱指導者を探るところから始まりました。

各地域で最初にお話することは、趣旨はもちろんですが、レクイエム・プロジェクトはコンサートを目的とした一過性のイベントでは無いということです。通年の継続した活動が前提で、その中で被災者の方々が悲しみや苦しみ、そして追悼の思いを共有・共感し合いながら、「歌うことの意味」を見つけていくということ。そしてコンサートはその過程にあるものだという事などを理解していただき、外部の人間である私への警戒心を少しずつ解いていく時間が必要です。お話させていただくためには、現地に私自身が何度も足を運び、直接お目にかかって話すしかありません。すべての地域の状況が違うわけですから。

Q:同じ兵庫県内の佐用町は水害に見舞われた地域ですが、やはり当初動き出すまでは難しかったようですね。

A:そうですね。同じ兵庫県内であっても、このプロジェクトを理解していただくことがいかに難しいかを実感しました。想定内のことでしたが、全く未知の活動、しかもよそ者である私自身が何をしようとしているのか困惑する人がたくさんいらっしゃったと思います。ところがその佐用町も今年活動8年目を迎え、合唱団の人数は少ないものの、積極的に活動に取り組んでくれています。そして何よりも活動1年目に作詩作曲した「大切なふるさと」は、プロジェクトから立ち立ちして全国の様々な合唱団で歌われる楽曲の一つになっていることは嬉しいことです。

Q:佐用で生まれた「大切なふるさと」が果たしている役割は、本当に大きいですね。広域展開のアプローチを始めた翌年の2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。未曾有の大災害でした。プロジェクトの主宰者として何を考えましたか?



A:あの日は、阪神・淡路大震災を経験した団員にとっても、私にとっても起こってほしくない大災害が起きてしまった日でした。実は前日の3月10日は、東京大空襲の日でもあり、東京のプロジェクトではその惨禍への思いを馳せたコンサートを行っていました。参加していた神戸の合唱団の有志も、翌日ゆっくり東京で過ごしていた人たちは揺れに見舞われ、交通の大混乱に巻き込まれました。

私も東京の自宅で震度5強の揺れを体験しましたが、東京近郊が震源の地震ではない気がしてテレビをつきました。次から次へと大変な状況が伝わってきます。信じられない大津波、逃げる人たち、なぎ倒される美しかったはずの松林、漁船も家も車も人も、何もかもが押し流されている。その場所で営まれていた生活が波に呑み込まれている。信じられない光景でした。

プロジェクトとしてすぐにできることは、まずは被災地へ義援金を送ること。すぐに行動しようと考えました。

Q:それでどうされたのですか?

A:震災発生から数日後、神戸と佐用町の団員に連絡をして、緊急支援チャリティーコンサートの実施を提案し、可能な限り早急に行動することを団員全員の賛同を得た上で確認しあいました。その結果、ホールや舞台スタッフなどの関係者の協力も得ることもでき、3月19日に佐用町、3月25日に神戸でチャリティーコンサートを開催することができました。

佐用町では、お小遣いを貯めた貯金箱を胸に抱えてきた小学生が、印象的でした。水害の心の傷がまだ癒えない佐用町の団員、あんな大災害は2度と起きてほしくないと思っていた神戸の団員、そして指導者である声楽家やピアニストそれぞれが、追悼と東北の被災地への思いを込め、演奏しました。



Q:東日本大震災の被災地でのプロジェクトを考えましたか?

A:神戸では、震災から13年目の年にプロジェクトを始めました。東北ではもっと時間が必要だと思っていました。それでも不思議なご縁や、きっかけがあり、震災後の早い段階で少しずつ動き出すことになります。

Q:具体的にはどこから動きが始まっていくのですか?

A:ご縁があって最初に東日本大震災の被災地を訪れたのは、岩手県野田村が最初でした。震災からわずか3ヶ月しか経っていない2011年7月初旬のことでした。野田村には、陸前高田と同じように素晴らしい松林が続く海岸・十府ヶ浦(とふがうら)がありました。それがことごとく津波で流され、漁港も三陸鉄道の線路も流され、更にはそれよりも陸側にあった住宅もことごとく流された状況を目の当たりにしました。

そして野田村の合唱団『コールわさび』代表の大澤和子(おおさわかずこ)さんと会い、詩人の宇部京子(うべきょうこ)さんと巡り合い、紆余曲折を経て、『レクイエム・プロジェクト北いわて』の活動が野田村で始まったのが2013年12月です。その後、久慈市長の遠藤譲一(えんどうじょうじ)さんのお力添えで、久慈市教育委員会のサポートなども得て、活動も充実していきました。

Q:その他の被災地はどのようなきっかけだったのでしょうか?

A:野田村を訪れた後、東京のプロジェクトに参加してくれていた岩手県出身の声楽を学ぶ芸大生に、被災地の知人たちがレクイエム・プロジェクトに対してどんな印象を持つか、リサーチしてもらいました。結果は、こと

ごとく否定的なものでした。それは直近に起こった大災害の被災地の反応として、当然のことだと思っていたので、無理に東北に進めることは控えていた部分があります。それに加えて東北在住の友人や音楽家の知り合いが、全くいませんでした。どうアプローチしたら良いのか見当もつかない状況だったのです。

ところが、ご縁というものは不思議です。沖縄プロジェクトで2012年にいったオーケストラとのコンサートに、仙台から子供を連れて避難していたヴァイオリニストが、演奏に参加していたのです。そしてコンサート後の交流会で、ご主人と離れて沖縄で暮らす彼女は、私のところに来てこういったのです。「仙台でプロジェクトはされないのですか？ きっと賛同する仙台フィルのヴァイオリン奏者を知っています。連絡するので、是非会って下さい。仙台でレクイエム・プロジェクトを実現して下さい」。



Q:それはすごい出会いですね。鳥肌が立ちそうです。

A:私にとっても感動ものでした。こんなこともあるのだなと思いました。2012年の9月に、紹介していただいた大友靖雅(おおともやすまさ)さん、そして彼が連れてきてくれた同じ仙台フィルでインスペクターをされている我妻雅崇(わがつままさたか)さんに仙台でお目にかかりました。大友さんも我妻さんも、どうやれば出来るかということから話がスタートし、実行委員長と指導は工藤欣三郎(くどうきんざぶろう)先生しか考えられないとのことで、工藤先生にその後初めてお目にかかり、お願いをし、かけがえのない存在として現在に至っています。

最初のコンサートは2013年11月で、東日本大震災被災地で最初のプロジェクト・コンサートになりました。神戸や東京のプロジェクト合唱団有志のほか、大船渡を拠点とする「けせん第九を歌う会」と陸前高田の「高田合唱団」有志の皆さんも参加しました。



Q:大船渡や陸前高田からも参加されたんですね。特に被害が甚大だった地域でもありますが、参加されたきっかけはどんなことだったのですか？

A:震災の翌年、2012年1月に陸前高田、大船渡を訪れました。それは甚大な被害を受けた被災地を、自分の脳裏に焼き付けておくというか、

追悼というプロジェクトの一番の基本がブレないようにするためでもあったのです。そして、知人から「けせん第九を歌う会」の指導者である千葉久美子(ちばくみこ)さんを紹介していただき、お目にかかりました。プロジェクトのお話はさせていただきましたが、「いつか歌えるようになったら、この曲も歌って下さい」と、その時点で出版されていた「レクイエム～あの日を、あなたを忘れない～」と「黙礼」の楽譜をお渡しするに留めました。ところが、楽譜をお渡しして早い時期に練習を始めて下さっていました。

そしてある方からの情報で、東日本大震災後に最も早く被災地で私のレクイエムを歌って下さった合唱団があるのと同じ、千葉さんにお尋ねしたところ、陸前高田の「高田合唱団」だとわかりました。そして千葉さんにも同席していただき、指導者の伊藤祥子(いとうしょうこ)さんとお目にかかったのが、2013年5月のことでした。



そんな出会いが、2013年6月の『けせん第九の会』の演奏会につながり、「黙礼」から“祈る”“風”“生きる”が演奏されることになりました。そして仙台のプロジェクトに2013年から参加へとつながっていくのです。「けせん第九を歌う会」そして「高田合唱団」のどちらも、津波でメンバーを亡くされています。それだけに、プロジェクトのコンサートに参加される思いは深いものがあります。

Q:「けせん第九を歌う会」の皆さんによる「黙礼」の中の“風”は、報道ステーションでもオンエアされましたが、あの時の演奏はお一人お一人の万感の思いが伝わる演奏でしたね。

A:震災から3年目を翌日に控えた3月10日の生中継でしたね。すでにその時には、団員のほとんどの方と面識があったので、その皆さんの演奏にくぎ付けになりました。

Q:そして南相馬ですが、その「黙礼」がきっかけになったようですが。

A:はい。順番は前後しますが、南相馬は、震災直後から詩人の和合亮一(わごうりょういち)さんと取り組んだ混声合唱組曲「黙礼」の舞台ともいえる地域なのです。2011年10月に東京のプロジェクト・コンサートで初演されることを、新聞記事で知った方からの問い合わせがきっかけになりました。その方は南相馬の「ゆめはっと合唱団」メンバーで、その曲を歌いたいという希望でした。その合唱団も、津波で団員が何人も亡くなっています。震災後やっとの思いで練習を再開し、辛いけれども自分たちが歌うべき楽曲だという思いで、震災後初の定期演奏会で「黙礼」全曲を歌ってくれました。

その練習に立ち会うため何度か南相馬にお邪魔するなかで、プロジェクトのことをお話し、「ゆめはっと合唱団」だけではなく、被災された他の方々にも公募で参加していただき、実施しました。約1年だけの活動でしたが、2013年の春から約1年間活動し、2014年4月にコンサートを行



いました。仙台のメンバー有志や、福島市の飯野混声合唱団有志、そして神戸や東京からもメンバー有志が参加し、「つながる」ことが次第に定着してきたことを実感したプロジェクトです。

Q:南相馬では約1年間の活動だったということですが、継続されなかったのはどうしてですか?



A:このプロジェクトの場合、継続が基本的には前提なのですが、地域によっては難しいこともあります。直近の被災地の場合、様々な追悼の音楽イベントもあり、そこに参加する人たちが多い場合は、練習時間の確保が難しくなります。特定の合唱団が中心になる場合は、特にその傾向がありますので、南相馬はそれに該当します。公募で参加された方は、続けたいと思った方が何人もいらっしゃいましたが、無理をしませんでした。

同じように短期間の活動だったのが気仙沼です。気仙沼は本当に短くて、4か月でした。追悼の何かを始めるきっかけにしたいという要望があり、実施しました。

Q:海外経由で実現した地域もあるのだからか?

A:広島です。東京は私の拠点でもあり、レクイエム・プロジェクトに当初から関わって下さっている声楽家もいました。長崎は大学時代の親友がレクイエム初演を家族でわざわざ聴きにに来てくれ、ずいぶん力を貸してくれました。

しかし広島は沖縄や仙台同様、誰一人知り合いがいない土地でした。長崎が動き出した2012年秋の段階でも、広島はどうやってアプローチを始めたら良いかもわからないままでした。そんなある日、Facebookで私のレクイエムに関することをやり取りしていた時、「そのレクイエムは、何語ですか?」と、デュッセルドルフ在住の声楽家・原令子(はらよしこ)さんからコメントが入り、「ラテン語です」と答え、一時帰国された際にレクイエムの楽譜とCDをお目にかかってお渡ししました。

原さんがそのCDを気に入って下さり、渡独後に車でずっとかけていた時、「この曲は誰のレクイエムですか?」と同乗していた同じく声楽家の植杉加奈子(うえずぎかなこ)さんが尋ねられたことから、原さんを介して植杉さんとFacebookでつながることになりました。



彼女のプロフィールを読んでいると、なんと広島出身だったのです。すぐに相談しました。そして現在、広島でヴォイストレーニングをお願いしている、声楽家の大島久美子(おおしまくみこ)さんを紹介してくれ、その大島さんから実行委員長と指導者はこの先生しか考えられないということで、佐伯康則(さいきやすのり)先生を紹介していただきました。そして広島プロジェクトの今があります。敬虔なクリスチャンでもある佐伯先生は、作曲家であり宗教曲にも精通するかけがえの無い存在として、支えてくださっています。「この先生しか考えられない」という点が、仙台の工藤先生と不思議に符合していますね。



Q:いろいろお聞きしていると、きっかけのひとつひとつが、何か見えない力に後押しされているような気がしますね。

A:確かにそうですね。自ら労を惜みず動いていくことで、何か見えない力に後押しされているなど感じるのが今でも多々あります。

3.いきる いのる ねがう

被災地から世界へ

Q:「いきる いのる ねがう」これが、レクイエム・プロジェクトで作曲している楽曲すべての根底に流れるシンプルなテーマだ、と私家版のエッセイに書いておられます。それらの楽曲に団員それぞれの思いを重ねて、聴いて下さる皆さんに伝えていくことが私たちの役割だと思っています。

楽曲を振り返ると、活動地域の詩人の方と合唱作品に取り組まれていることがよくわかるのですが、これにはどんな理由があるのですか？

A:東日本大震災の被災地では、福島のと合亮一さん、岩手の宇部京子さん、そして沖縄では伊波希厘さん、広島・長崎では上田由美子さんという4人の詩人と作品に取り組んできました。それは、ひとつは「今」を生きている詩人の方々と、各地域の惨禍への思いを共有しながら、レクイエム・プロジェクトの趣旨も踏まえて詩を書き下ろしていただくことで、より明確なメッセージとしての「うた」が生まれると思っているからです。

もちろん誰でも知っているような詩人の作品にも、素晴らしいものがたくさんありますが、プロジェクトでの作曲は、レクイエム作曲の時もそうであったように、私の作品というよりは活動地域で懸命に生きている多くの被災者の方々の思い、そして更には「いのちへの思い」を、合唱作品という形にして残していくのが、私の役目だと思っています。詩人を探し、出会い、共に取り組むことも、その役目を果たすための大切なプロセスなのです。

私家版エッセイのメインタイトルは、「こころ重ねあう歌を求めて」なんです。このプロジェクトから生まれた合唱作品が、より幅広い人たちに歌われ、プロジェクトに参加していなくても楽曲の底辺に流れる「いきる いのる ねがう」というテーマを感じ取ってもらい、同じ思いを共有できるようになれば嬉しいですね。

Q:すでにプロジェクト以外の全国の合唱団でも歌われていますが、これまでにプロジェクトで生まれ、出版されたものはどれくらい広がっているのでしょうか？ 意外にプロジェクトに参加している合唱団員も、ご来場いただく人たちも、プロジェクトの中だけで歌われているように思っている人が多いかもしれませんので、教えて下さい。

A:合唱作品は、現在16冊が全音楽譜出版社とカワイ出版から出版されています。その内プロジェクトで生まれた作品に限定して言えば、同じ組曲で男声版と女声版両方で出版されている作品を含め、13冊になります。プロジェクトの合唱団以外でその13冊に含まれている楽曲をこれまで演奏している団体は、色々あります。

私が把握しているのはほんの少しですが北から言えば、芸術集団ラクリモ座(札幌)、混声合唱団響友会(札幌)、高田合唱団(岩手)、けせん第九を歌う会(岩手)、岩手大学合唱団(岩手)、葛巻コーラルオー(岩手)、コーラル・ユーベル(宮城)、フリューゲルあおば(宮城)、混声合唱団グラン(宮城)、コーロ・カナリーノ(宮城)、こ〜る・なんざい(宮城)、横手混声合唱団(秋田)、ゆめはっと合唱団(福島)、飯野混声合唱団(福島)、東京芸大音楽科学生有志による特別編成の混声合唱団(東京)、ハイドン・コレギウム合唱団(東京)、混声合唱団ステラマリス(東京)、労

音おおくぼ合唱団(東京)、くにたち混声合唱団ときわ(東京)、混声合唱団あかり(東京)、横浜YMCA混声合唱団(神奈川)、東海大学混声合唱団(神奈川)、伊勢原混声合唱団(神奈川)、竜ヶ崎混声合唱団(茨城)、女声コーラス コール・ドルチェ(埼玉)、常葉学園菊川中学高校合唱団(静岡)、コール・ノルテ(静岡)、クール・グルヌイエット(静岡)、静岡女声合唱団(静岡)、静岡大学混声合唱団(静岡)、静岡混声合唱団TERRA(静岡)、長円寺讃禱歌合唱団(長野)、南山大学スコラ・カントールム(愛知)、小牧市民合唱団(愛知)、アンサンブル・アワーズ(京都)、京都ゲバントハウス合唱団(京都)、吹田混声合唱団(大阪)、大阪薬科大学混声合唱団(大阪)、泉の森ハーモニー(大阪)、河南混声合唱団(大阪)、女声合唱レガータ(大阪)、混声合唱団キアラ・コンパニーア(大阪)、堺市民合唱団(大阪)、合唱団泉北(大阪)、泉南混声合唱団(大阪)、『唱歌の学校』心のうた合唱団(大阪)、神戸市混声合唱団(兵庫)、女声合唱コール・ハイフォニカ(兵庫)、東広島女声 Via Lactea(広島)、女声合唱団 La claberina(広島)、女声合唱団・彩が丘コーラス(広島)、福岡大学混声合唱愛好会プレミエールコーラル(福岡)、北九州記念混声合唱団(福岡)、九州大学コーラルアカデミー(福岡)、純心コーラルマリーエ(長崎)、城岳混声合唱団(沖縄)、つしま丸児童合唱団(沖縄)、浦添青少年少女合唱団(沖縄)、沖縄・名護ジュニアコーラス(沖縄) などなど、ずいぶん広がってきました。

Q:少しお聞きただけでも様々な合唱団で歌われていることがわかりますね。このプロジェクトに関わっている各地の合唱団員も、こんなに広がっているとは知らなかったと思います。そして海外でも公演が行われるようになり、よりグローバルに活動や楽曲が知られるようになってきました。プロジェクトの立ち上げ当初に考えられていたラテン語をテキストとする意味合いが実践されているわけですが、海外公演を行うきっかけは何だったのでしょうか。

A:海外公演の最初は2012年、チェコのプラハでした。東日本大震災から1年後のことです。目的のひとつは、改めて海外の人たちにもこの未曾有の災害を思い起こして欲しいということから、東日本大震災の追悼チャリティーコンサートを行うため。もうひとつは、その機会に私のレクイエムをチェコのオーケストラでレコーディングして、CDとして形にしておくためです。そのことを通して、海外の人たちにこの活動や楽曲を知ってもらおう機会を持ちたいと思いました。

Q:私もプラハでの追悼チャリティーコンサートに参加しましたが、なぜプラハだったのですか？

A:プラハという街は、私が個人的に大好きな場所だということがまずあります。それまでも何度か訪れ、親しくなった日本人の友人がいました。その一人にプラハ交響楽団の打楽器奏者、本田淳子(ほんだじゅんこ)さんなど、力になってくれる人が何人かいたことが大きな理由です。その人たちのおかげで、在チェコ日本国大使館の協力や後援を得たり、プラハフィルハーモニー管弦楽団、キューン合唱団とのレコーディングを2012年3月下旬に、そしてドヴォルザークホールでの追悼チャリティーコンサートを同年4月1日に実現できたのです。

Q:その他にも、2014年にウィーン、2016年にイタリアでも公演が行われましたが、海外公演の目的はプロジェクトの趣旨との整合性を考えておられるのでしょうか?



A:もちろんです。レクイエム・プロジェクトの合唱団は、各地ともいわゆる合唱愛好家の集まりではありません。直接の被災者だったり、趣旨に賛同した人たちが、継続した練習や国内各地のコンサートに於いて思いを共有したり、お互いに共感し合いながら、合唱をとおして「追悼と未来への希望」そして「いのちへの思い」を伝えていくことを目的とする活動でもあるわけです。ですので、プロジェクトとして公演する意味がある場所で行っています。

また海外公演の場合、参加希望者だけではなく参加しない人たちも、同じ目標を持って練習に臨むことで、各地域のコンサート同様に、このプロジェクトの意味を再認識していただく機会にしています。そして必ず国内でも海外公演での演奏曲を取り上げます。そのことで、団員全員の努力が無駄にならないようにしています。



Q:公演先はどのように決めているのですか?

A:プロジェクトとして公演する意味がある場所ということで選ぶわけですが、例えばウィーンの場合は、ブラハ交響楽団の本田さんがこの活動とレクイエムを気に入って下さり、聖シュテファン大聖堂で毎日のように行われているコンサートの統括などを行っているセクションの方に紹介して下さったことから始まりました。そして聖シュテファン大聖堂主催の公式グラウンドコンサートとして、大聖堂でレクイエム・プロジェクトのコンサートを開催しました。

その意味としては、東日本大震災の時に義援金など、多くのご支援をウィーンのカトリック教会などを通じていただいたことに対して、日本人として感謝の意を表すこと。そして震災から3年という年に、もう一度その犠牲となった方々への追悼の思いを、ウィーンの方々とともに音楽を通して共有することでした。



Q:ウィーンの公演は、プロジェクトの活動地域各地からたくさん参加することになりましたが、何人でしたでしょうか。

A:日本から8人の声楽ソリスト、仙台フィルメンバー有志4人、そして神戸、東京、広島、長崎および陸前高田・南相馬・仙台などの東日本大震災被災地の合唱団有志など、総勢158人が現地のプロ・オーケストラとともに公演を行いました。



Q:プラハに続いて私も参加していますが、すごい人数でしたね。被災地の仙台フィルからも参加して、現地のプロの人たちと共に演奏したあのコンサートは、プラハとはまた違った意味でもとても印象深いものでした。演奏が終わってからも10分以上スタンディング・オベーションが続きましたね。

A:そうでしたね。プラハの時は、プロジェクト自体が始まって4年目に入る時期で、神戸と東京のメンバーが20人ほどと、ソリスト4人が日本から参加しましたが、あとは合唱団もオーケストラもすべて現地の皆さんでしたからね。ただ初めての海外公演で、自分の音楽が確実に伝わっている実感を持てたことが大きな収穫でした。

Q:直近のイタリア公演も意義あるものだったと思いますが、そのきっかけはまた違うのですよね?

A:イタリアは日本同様、地震国です。2009年にはラクイラという街が震災で大きな被害を受け、まだ復興半ばという状況にあります。そのラクイラを含むイタリアは、プロジェクトのコンサートを行う意味があると前から考えていました。ウィーンの公演でお世話になったエムセックインターナショナルの丸尾直史(まるおなおふみ)さんと、そのことをお話していたことがきっかけになりました。

結果的にラクイラは経費の問題がネックになり、実現出来ませんでした。バチカンのサン・ピエトロ大聖堂ミサでの演奏、そして演奏出来る機会がめったに無いシステーナ礼拝堂での献唱、そしてラクイラ同様に震災の被災地でもあるアッジの聖フランチェスコ教会、そしてフィレン



ツェのサンタ・トリニータ教会の4か所で、「復興祈念、平和への祈り」という趣旨のレクイエム・プロジェクト「バチカン・イタリア特別公演」を行うことができました。

そして、この公演のために作曲した「ミサ・プレヴィス～平安への祈り～」が、アッシジでの世界初演に先立ち、ローマ法王への楽曲献呈という栄誉を、バチカン教皇庁から与えられました。

Q:イタリアも深く心に刻まれる公演でした。行程の最後にビデオ撮影のクルーの方からインタビューを受けたとき、感極まってなかなか言葉になりませんでした。気軽な演奏旅行とは違い、とてもハードな練習と10日間に及ぶイタリアでの行程でしたが、それだけに成し遂げた時の感動は大きかったです。

A:イタリアでも、すべての経験が意義深いものになりましたね。2016年は特別聖年の年でもありましたが、その記念すべき年にサン・ピエトロ大聖堂でのミサで歌えたこと、そして天から音が降りそそぎ、身体全体というか魂まですべてを優しく包み込まれる感覚を体験したシステーナ礼拝堂での献唱、アッシジではジョットの絵画に囲まれた聖フランチェスコ教会をメイン会場に毎年行われている、「Assisi pax mundi (アッシジ・パックス・ムンディ)」という世界平和を願う音楽祭のオープニングコンサートとして、演奏の機会を与えられました。

このコンサートと一緒に演奏して下さった「Orchestra da Camera di Perugia (ペルージャ室内オーケストラ)」の皆さんの真摯な演奏も印象的でした。フィレンツェでは、レクイエムの5曲目「ラクリモーザ」で、涙する外国人の若い女性が特に記憶に残っています。

Q:海外公演では他にも印象的な瞬間がいくつかありますが、ひとつだけ紹介してください。

A:ウィーンで本番当日の昼間のリハーサル中にすごい瞬間がありましたね。レクイエムの8曲目「Agnus Dei (アニュス・デイ)」が静かに終わっていく中で、聖シュテファン大聖堂の鐘が鳴っているのに気が付きましたよね。鐘の音が、曲の最後数小節の和音の中の音だったので、鳴り始め

は気が付かなかったわけですが、音楽の最後の部分とクロスフェードするかのごとく聴こえてきて、まるでレクイエムと同化しているように感じました。鳴り終わるまで待って、次の曲「光の彼方へ」へ入ると、今度は天の啓示のごとくステンドグラスから柔らかな太陽の光が差し込んできて、私たちを照らしてくれました。「いきるいのる ねがう」、その歌声は確かに届いているんですね。

Q:思い起こすと貴重な経験ですよ。これまで3回の海外公演がありました。今後の予定などはあるのでしょうか？

A:実は2019年10月にポーランド公演を予定しています。これまでの海外公演は、どちらかといえば自然災害の追悼という側面が強かったのですが、世界も日本も今とても危うい時代に近づいているように思います。ひたすら平和であって欲しいと願わずにはいられません。そして各地の合唱団のメンバーも次第に高齢化し、参加することも次第に難しくなるようにも思います。沖縄・長崎・広島で活動してきたプロジェクトとして、丸木ご夫妻の「原爆の囀」をずっと見てきた私自身の思いとして、第2次世界大戦で夥しい数の人たちが犠牲になったポーランドはやはり訪れておきたいと思うのです。

ポーランドの大阪総領事館の名誉総領事だった方が、神戸の合唱団メンバーだった時期があります。仕事が多忙になったこともあり、今は在籍されていませんが、その方から在籍中に「ポーランドでプロジェクトを行う時は、是非相談してください」と言われていました。そんな不思議なご縁もあり、昨年夏の終わりごろ、久しぶりに連絡したのです。そうしたところワルシャワ大学の日本学科の教授陣とつないで下さり、日本学科設立100周年の年の記念行事期間中に、交流のコンサートを大学のホールで行うことになりました。それが2019年10月なのです。

そしてこれまでも海外公演でお世話になっているエムセックの丸尾さんにもお力添えをいただき、プロジェクトの趣旨や活動内容に賛同して下さったクラクフ市が全面協力して下さることになりました。その結果、シフイドニツァの平和教会、クラクフの聖マリア教会、ワルシャワの聖十字架教会でのコンサートや献唱が予定されています。もちろんアウシュビッツも訪れます。

後から知ったのですが、驚くことに2019年は日本・ポーランド国交樹立100周年の年でもあるそうで、不思議な巡り合わせだと思います。

Q:神戸の元合唱団員の方がつなぎ、実現する海外公演。意義ある公演にしたいですね。

A:本当にそうですね。ただ誤解のないようにお話しておきますと、定期的に海外公演を考えているわけではないのです。2012年、2014年、そして2016年と2年ごとに海外公演を行いました。それは東日本大震災から1年、3年、5年という節目だったことと、必ずきっかけがあったことが大きな理由です。まず一番大切にしないといけないのは、それぞれの地域に根差した国内の活動です。そこがブレないように気を付けています。

Q:プロジェクトの発端となるルミナリエの作曲も、それまでの仕事の縁がきっかけになりました。「今まで携わった仕事すべてが、人とのつながりの中でこそ実現できた」と、エッセイでも述懐しておられますが、人の縁というものは、思えばほんとうに不思議ですね。

A:本当に不思議です。すべてがつながっています。ルミナリエの仕事をしなれば、私が主宰する追悼コンサートやレクイエム・プロジェクトは存在していなかったかもわかりません。

そうすると、神戸をはじめ各地の指導者の先生方や合唱団員の方とも

巡り合っていません。また違った作曲家としての生き方をしていたと思います。なによりもこれほどたくさんの合唱作品を作曲していなかったでしょうね。

Q:かなり長時間のインタビューになりました。まだまだお聞きしたいことはありますが、ここまで目を通していただければ、レクイエム・プロジェクトの全体像が少しは分かっていただけるのではないかと思います。最後に、これからのプロジェクトの方向性などありましたら教えてください。

A:目新しいことをするつもりはありません。方向性も基本的には同じです。今年は広島・仙台・北いわてが活動5周年を迎えます。東京と佐用町は活動9年目、長崎は7年目に入ります。それぞれの地域を大切にしながら、少しでもきめ細かな対応をしながら、これまでと同じようにコツコツと活動を続けていきたいと思っています。

今回のレクイエム・プロジェクト神戸2018には、約230人の合唱団員が参加してくれます。全国各地の活動地域の団員数の約半分の人たちが参加することになります。そしてこれまで練習や演奏を支えて下さった指導者の方々、そしてピアニスト、オーケストラの皆さんも多数参加してください。感謝の言葉しかありません。本当に有難うございます。

各地の合唱団は常時団員を募集しています。新たな参加者を心からお待ちしています。



このインタビュー記事は2018年に開催された活動10周年のコンサート時のものです。
阪神・淡路大震災から25年を迎えた今年、もう一度このプロジェクトのことを知っていただきたく、再掲致します。



技術の力で未来を支える



建設ファスニング技術を通じて道路・鉄道・建築耐震などの安全対策に注力し、社会の発展と環境づくりに貢献します。

GBRC 性能証明 第01-03号 改2

ハイブリット 耐震補強工法

本工法は、工事中の騒音や振動、粉塵を軽減できる特長を生かしながら、病院や学校あるいは事務所建築を中心とした、居ながらの耐震補強工事を可能としました。



内付工法 内装仕上げ例



外付工法 外観



ケー・エフ・シーはレクイエム・プロジェクトを応援します！



建技審証第1203号

せん断補強 **RMA** 工法

「既存ボックスカルバートや擁壁などの連続壁に対し、内空断面を侵さず補強を行いたい。」そんな希望にお応えするため開発されたのが、RMA 工法です。



RMA 工法施工前



RMA 工法施工後

【事業内容】

耐震関連工事の設計・施工及び環境・安全施設工事
建設用ファスナー類及び付属品の販売・施工
トンネル掘削用資材の販売

【事業所】

東京・大阪・名古屋・仙台
横浜・静岡・岡山・広島・福岡



株式会社 ケー・エフ・シー

<http://www.kfc-net.co.jp>